

---

# Secret Operations

MONDOERA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S e c r e t   O p e r a t i o n s

### 【Nコード】

N 2 8 0 2 B A

### 【作者名】

M O N D O E R A

### 【あらすじ】

2004年7月28日、東京都練馬区月見台ススキケ原は一瞬にして地獄と化した。その地獄は、日付が29日に変わる瞬間に、無生物の世界と化した。そう、小学校の地下に建設された生物兵器研究所の中性子爆弾によって。その地獄から脱出を果たしたのは、野比のび太、骨川スネ夫、剛田武、緑川聖奈、相葉真理奈、牧野燐の6人だった。しかし、ある2人の人間が、その者達の脱出に協力していたのだ。

この小説は、『のび太のBIO HAZARD』『THE NIGHTMARE』の別視点の作品です。読んでいない方は、先に、『のび太のBIO HAZARD』『THE NIGHTMARE』を読む事を推奨します。

——部屋で作戦内容の確認をしていると、ふと時間が気になり、時計を見た。すると、時計は、6時30分を刻もうとしていた。T・ウィルス散布は7時から始まるから、後30分程で、この地は地獄と化す。ドラえもんやのび太君達5人は、11時30分頃に、『どこでもドア』で、ススキケ原に到着する手筈となっている。——未来の為に必要な事とはいえ、のび太君達を騙すのは少々気が引ける。しかし、これも仕事だ。そう考えていると、いきなり、通信機のコール音が鳴り響いた。僕は徐に通信機に出た。

「こちら出木杉。何か？」

僕はそう言った。すると、通信機の向こう側から聞き慣れた声が聞こえた。

「作戦開始30分前よ。準備は出来てる？」

通信機から聞こえてきた声はナーシャのものだった。僕はそれに応える。

「まあね、僕を誰だと思っているんだい？」

少々癪に障る様な言い方をしてみた。

「そうね、期待してるわ。」

……ナーシャはやはりいつも通りか。……まあいいや、僕は僕の仕事を  
——  
事をするだけさ。——  
と思

ったが、ふとある事に気がついて、ナーシャに尋ねた。

「……ところで、君は今何処にいるんだい？」

僕がそう言い終わらない内に、通信機の向こう側からナーシャが  
——  
応えた。

「今、ススキケ原に向かっているわ。『タイラントT・ウィルス』が散布された  
——  
一時間後ぐらいに着くかしらね。」

ナーシャのその返答を聴き、話を切り上げる。

「じゃあ、健闘を祈っているよ。」

僕がそう言つと、ナーシャは、

「あなたもね。」

と言つた後、通信を切つた。僕も、通信を切り、通信機を懐に入れた。そして、作戦内容を再確認した。

まず、7時にT-ウィルスが散布された後、のび太君の家の周りを重点的に警戒する。勿論、のび太君達が帰つて来た時に、ゾンビ共に急襲されないようにする為だ。そして、のび太君達が学校に到着した後、のび太君達に極力見つからない様に行動する。僕の遂行する最も重要な作戦は、T-ウィルスサンプルの奪取とスキケ原研究所で研究、開発を進めてきた、『Tyran t-L』と『Shoggoth』の情報の回収だ。……恐らく、のび太君達なら、この地獄でも生還出来るだろう。しかし、このスキケ原研究所のみで開発している、『Shoggoth』と呼ばれる生物兵器だけが気がかりだ。何も無ければ良いけどね。……そう考えながら、30分の時を過ごした。

やがて、時計の針が7時を刻んだ。もう、T-ウィルスの散布を行っている事だろう。

・ ・ ・ ・ ・

やがて、1時間近く経っただろうか。外が少し騒がしくなった。

「……………遂に始まったか。」

僕は徐に窓から外を覗いた。すると、ゾンビらしき人間が3、4人ほどこいた。そのゾンビから逃げ惑う人が多数いる事から、ゾンビが人間を既に襲ったという事は推測に難くなかった。やがて、玄関の扉を叩く音が聞こえる。どうやら、地獄は始まったようだ。僕は、FN ファイブセブンにマガジンを装填し、チャンバー内に弾薬を装填した。そして、引き出しの中に入っている、『雷管』と『爆薬』を取り出した。僕は部屋から出て、階段の傍で屈みこんだ。そして、爆薬に雷管を取り付け、階段にそれを仕掛けた。そして、その場から数メートル離れ、雷管から延びた、起爆スイッチを押した。家の中に爆音が鳴り響き、階段は粉碎された。その音にゾンビ共が気づいたが、階段が粉碎されているので、上る事は出来ない。僕は、粉碎された階段の傍から、ゾンビの頭部を狙撃した。のび太君みたいな早撃ちは出来なかったが、時間を掛けて狙い撃ちした。

30秒もすると、6体程いたゾンビも絶命した。僕は自室に戻り、のび太君の家を見た。のび太君の家は綺麗な方であり、近くにゾンビはいなかった。しかし、のび太君の家に向かって見えるように見えるゾンビは何体かいた。僕は、机の横に置いていた、スナイパーライフルの部品を組み立てた。そして、組み立てたスナイパーライフ

ルを窓から出し、スコープを覗いた。そして、のび太君の家の近くを徘徊しているゾンビの頭部を撃ち抜いた。

のび太君の家を壊される訳にはいかなかった。それは、作戦の任務の一つではあるが、何よりも一番の理由は、のび太君を生き残らせる為だ。彼はあらゆる世界でその力を惜しみなく活用してきたが、それをいつも万全に使えるとは限らない。おまけに彼は、血が苦手だ。碌な武器もない状況では生きるのは難しいだろう。だから僕が陰ながら援護する。そうすれば、彼は放っておいても、生き残るだろう。僕が今やるべき事は、ゾンビを狙撃する事だ。

暫くは、この単純作業の繰り返しだ。3時間30分後に、のび太君達がススキ原に着くまではね。

「……暇だな。」

僕はそう呟き、スコープから目を離れた。その時、視界の端に見知った顔が見えた。

「——あれは、安雄君と……はる夫君か。」

赤いベースボールキャップを被った小柄の少年と、やや小太りの少年の姿を見た僕はそう呟いた。

やっぱり、同級生を見殺しにする訳にはいかないね。

そう考えた僕は、『FN ファイブセブン』を構え、安雄君とはる夫君の近くのゾンビを銃撃した。その二人の近くにはあまりゾンビがいなかったたので、殲滅するのは難しくなかった。すると、僕の存在に気づいた二人が僕に気づいた。

「出木杉じゃねえか！ ちょっとそっち行っていいいか？」

そう言ったのは、安雄君だった。すると僕は、部屋の隅から、建設現場で使うようなワイヤーを、窓からぶら下げた。元々は、僕が、家から脱出する時に使おうと思っていた物だ。まさかこんな所で使うとは思わなかったけれどね。

「玄関は今、入れない状態だ。悪いけど、このワイヤーを伝って来てくれ。」

僕はそう言った。すると、安雄君が、ワイヤーを掴み、よじ登って来た。数十秒すると、僕がいる窓まで上がってきて、僕の部屋の中に入ってきた。

「おい、出木杉！ これは一体どういうことだ！？」

安雄君がそう叫んだ。まったく、これだから凡夫は困るね。事を急ぎすぎる。

「まずは、はる夫君を引き上げよう。話はそれからでも遅くない。」僕はそう言いながら、窓の下を見た。すると、はる夫君が僕に叫んできた。

「出木杉ー。このワイヤーを登って来いって言うけど、僕には無理だよ。」

……成る程、確かにあの体型じゃ難しいかもね。

「じゃあ、そのワイヤーを放さないようにしっかりと握ってくれ。後、両足を壁にくっつけるんだ。僕達がワイヤーを引き上げる。」

僕がそう言うと、はる夫君は、僕に言われた通りの姿勢を作った。すると僕は安雄君に話し掛ける。

「どうやら、はる夫君が一人では上がれないらしい。僕達二人でワイヤーごとのはる夫君を引き上げよう。」

僕がそう言うと、安雄君は、

「ちっ、仕方ねえな。」

と言いながら、ワイヤーに手を延ばした。そして、二人で一気に引き上げた。

数秒すると、はる夫君を引き上げるのに成功した。窓の外を見ると、さっきまではる夫君がいた場所にゾンビが群がっていた。――意外と危ない状況だったかもしれないな。そう考えていると、安雄君が言い放つ。

「おい、この状況は一体何なんだ！？ 出木杉！ お前なら何か知

ってるんじゃないか？」

安雄君がそう言った。勿論、僕は全て知っている。この状況は、『ナムオアダフモ機関』が『T-ウィルス』をススキ原に散布した所為だと。しかし、本当の事を言う訳にはいかない。少なくとも、のび太君達と合流するまでは。

「……僕にも解らないよ。こんな状況は、今までどんな国でも起きていない。」

——— 適当にそう応えた。すると、安雄君が頭を垂れながら言う。

「……そりゃそうだよな。ごめんな、叫んだりして。」

……そう言われると、申し訳ない気持ちになる。こうなったのは、僕の責任でもある。例え、世界の為とはいえ、やりにくいな。

「……出木杉！ お前あんなの持ってたのか！？」

はる夫君がいきなりそう言った。はる夫君の視線を追っていくと、さっき使ったスナイパーライフルがあった。

——— しまった。完全に忘れていた。なんとかして誤魔化さないと。

「……さつき、警察の人と会って、その銃火器をもらったんだ。身を守る物が無いと危ないって言われてね。」

……言い訳としては少々苦しいが、誤魔化し切れるだろうか。

「……そうか、なら解るな。その警察の人からどんな武器をもらったんだ？」

安雄君がそう言った。どうやら、この言い訳は通用したようだ。

僕は安雄君とはる夫君に、持っている銃火器を殆ど見せた。それは、『コルトM79』と『ベレッタM92FS』、『レミントンM870 MCS』、『SVD』だった。それを見たはる夫君は、まじまじと見つめ、やがて口を開いた。

「一口に銃と言っても、いろいろあるんだなあ。」

……そうか、はる夫君達は、銃の種類すら知らなかったわけ。そう思いながらも、僕は任務内容を思い出していた。

僕の任務は、11時30分にススキケ原に到着するのび太君達の為に、のび太君の家の周囲にいるゾンビを殲滅する事だ。今の所は特にする事は無いが、常にのび太君の家を監視していなければならぬ。なんとかして、僕一人になる状況を作らなくては駄目だな。………差し当たり、小学校に避難させるか。確かこの辺では、小学校が避難場所になっていた筈。地元警察が、ゾンビやB・C・Wを殲滅できる程の戦力は持っていないと思うけれど、流石に3時間位は持ちこたえられるだろう。今の所は、安雄君とはる夫君を小学校に避難させるか。

「いつまでも此処に籠城しても何も解決しない。確か小学校に警官隊がいた筈だから、一旦そこに避難しよう。これからの事は、それから考えればいい。」

僕は安雄君とはる夫君の二人にそう言い放った。すると、はる夫君が叫ぶ。

「小学校に警察がいるのか!? なら早く行こうぜ!!」

はる夫君はそう叫びながら立ち上がったが、安雄君が口を開いた。「その意見には賛成だけど、あのゾンビみたいな奴らに襲われたらどうするんだよ?」

安雄君がそう言うと、僕はゆっくりと答える。そうする事で、パニックになる確率が低くなるからだ。

「さっき、窓からゾンビ共の動きを見ていたけれど、力は些か強いようだ。只、動き自体は遅いらしいね。だから、ゾンビの脇を擦り抜けるように走れば掴まらない筈。危ない場所では、ゾンビの足を銃撃すれば、大丈夫な筈だ。」

僕がそう言うと、安雄君は少し安心して見えた。

———そういえば安雄君はお化け嫌いだったな。竦み上がって、腰を抜かさなきやいいけど……。

僕がそう思っていると、はる夫君は傍にあった、『ベレッタM92FS』を拾い、口を開いた。

「なら、早く行こう。こんな所いつまでもいられない。」

……はる夫君はやたら焦っているように見えるな。まあそれもそうか。僕だって、ゾンビ共の餌になるのは御免だ。

——しかし、一つ気になる事があるな。

そう思った僕は、はる夫君に尋ねた。

「はる夫君、銃の使い方は判るのかい？」

僕がそう尋ねると、はる夫君は黙ってしまった。どうやら判っていなかったようだ。

「意気込むのもいいけれど、慌てれば足元を掬われるよ。銃の使い方を簡単に教えるよ。」

僕はそう言いながら、拳銃ハンドガンの使い方を教えた。とは言っても、引き金の引き方と照準器の使い方、マガジン交換の仕方くらいの、必要最低限の事しか教えなかった。動くなら、なるべく早い方がいい。

暫く教えると、はる夫君は拳銃ハンドガンの使い方がある程度解ったようだ。安雄君には、『コルトM79』の使い方グレネードランチャーを教えた。擲弾発射器は扱うのが難しいと言ったが、安雄君は、「これがいい。」と言って聴かなかった。確かに威力は高いが、照準の仕方が他の小火器と違う為、僕には扱いにくい。しかし安雄君は、それでもいいと言った。

それから十数分後、安雄君とはる夫君に、銃火器の使い方の教授が  
終わった。時計を見ると、8時30分を回っていた。僕は、ある程  
度の銃火器とボウナイフを用意すると、安雄君とはる夫君に言う。  
「よし、準備も終わった事だし、早速、小学校に向かおう。」

僕はそう言いながら、窓から外を覗き込んだ。窓の下には数体の  
ゾンビがいた。僕は、『FN ファイブセブン』を構えると、真下  
のゾンビの頭部目掛けて発砲した。2発程外れたが、その他の弾丸  
は、ゾンビの脳幹を撃ち抜いた。更に、周囲のゾンビも、『SVD』  
で射殺すると、ワイヤーを降ろして、ワイヤーを伝い、地面に着地  
した。安雄君とはる夫君もそれに続いた。二人は着地すると、はる  
夫君は『ベレッタM92FS』を構え、安雄君は『コルトM79』  
を構えた。素人にしては中々様になっている。

「で、小学校には、最短距離で行けばいいのか？」

安雄君がそう尋ねた。

「…取り敢えずは最短距離でいいだろう。ゾンビがいたら、何か作  
戦を立てよう。」

僕はそう答えた。無駄に歩き回って体力を消耗するよりも、少々  
危険を冒しても、最短距離を進む方が得策だと考えたからだ。それ  
に、のび太君の家から小学校に向かうなら、直線距離自体が長いか  
ら、どちらの方法を取っても大差はないが、僕の家から小学校は近  
いから、最短距離を進んで行く方がいい。

「行くなら迅速に行動しよう。」

僕は、二人にそう言うと、『FN ファイブセブン』を腰の辺りに落とし、小走りで小学校に向かった。途中、ゾンビが数体いたが、微々たるもので、すぐに始末出来た。小学校までもうすぐという所ではる夫君が叫んだ。

「！ うわぁ！ 奴らだ！！！」

安雄君と共に後ろを振り向くと、10体近くのゾンビが大挙してこちらに向かってきていた。

「安雄君、いよいよ君の出番だな。使い方はさっき教えた通りだ。」

僕がそう言うか言わない内に、安雄君は射撃態勢を整えていた。やがて、安雄君は引き金を引き、それと同時に、銃口から、『HE 弾』が発射され、ゾンビの集団の中の一体に命中した瞬間に炸裂した。炸裂時の衝撃によって、ゾンビは全て吹き飛んだ。ふと、安雄君の顔を見ると、驚いたような顔をしていた。榴弾の破壊力に驚いたのだろうか？

「……………」

安雄君とはる夫君は立ち尽くしたまま、黙り込んでいた。このまま何もしない訳にもいかないので、安雄君とはる夫君に言う。

「…早く小学校に向かおう。もたもたしてる時間は無い。」

僕がそう言うと、安雄君とはる夫君は少し戸惑っていたが、少しすると、僕が言った事に肯定してくれた。

僕達は再び、小学校に向けて走り出した。やがて、小学校の校門が見えた。小学校の校門をくぐろうとすると、後ろから、ゾンビの呻き声が聞こえた。慌てて振り向いたが、ゾンビはすぐ傍の位置にいた。僕は懷からボウナイフを取り出そうとしたが、いきなり後ろから声が聞こえた。

「伏せろ！」

僕はその言葉の意味を理解すると、安雄君とはる夫君の二人も伏せるよう促した。すると、僕達の頭上を一発の弾丸が旋回しながら飛んでいった。その弾丸は、ゾンビの額を撃ち抜いた。額を撃ち抜かれたゾンビはその場に倒れた。

「大丈夫か？」

その声が聞こえた方向を向くと、S A Tの隊員と思われる服装をした男がいた。その男の手には、ドットサイト付きの『H & a m p ; K M P 5 A 5』が握られていた。

「ええ、助かりました。」

僕がそう答えると、そのS A T隊員は僕達の手に握られている銃火器を見ながら言う。

「……何故こんな銃火器を持っているかは知らないが、警察の作戦書類上では、『銃砲刀剣類所持等取締法』の一時解除はされてる筈だったな。早く小学校に入れ。中に警官隊がいる筈だ。」

S A T隊員がそう言う、はる夫君が言った。

「中に警官隊がいるのか！ おい、早く行こうよ！！」

はる夫君はそう言いながらさっさと小学校の中に入っていく。僕達も小学校に入る事にした。小学校に入る前に、校庭を見ると、S A T隊員と陸上自衛隊員がいた。この事から推測すると、避難所の防衛を自衛隊とS A Tに任せ、避難民の誘導と保護を警察に任せつつところか。でも人外の生命体とは戦い慣れてないから、生き残れるかどうかは難しいかもしれないね。

そう考えてながら歩き、小学校の玄関を通り、下駄箱付近まで来ると、警官が走り寄ってきた。そして、僕達に話し掛けた。

「よく無事だったね。銃を持っているようだけど、銃は使えるのかい？」

その警官がそう尋ねてきたので、僕は、

「銃は人並みには扱える。」

と、答えた。すると警官は僕達に、言った。

「銃が使えるなら、西側の渡り廊下を進んで、裏口近くにいる警官に話し掛けてくれ。その警官が君達を誘導してくれる筈だ。」

警官がそう言う、安雄君とはる夫君はさっさと、渡り廊下に向かった。二人共、薄々勘付いていると思うが、警察は、銃を扱える人間を、小学校の防衛に駆り出そうとしているんだろ。…なんと

か出し抜いて、のび太君の家に行ければいいけどね。

そう考えている内に、渡り廊下を渡り切り、北舎に着いた。すると、裏口の前には、銃を構えた警察官が3人程いた。僕はその警察官の中の一人に話し掛けた。

「すみません。僕達は、玄関の警官の指示で此処に来いと言われたんですけど。」

僕がそう尋ねると、その警察官は、少し厳しい顔をした。恐らく小学生が銃火器を持つている事を不審がっているんだろう。

「ここに来たって事は、銃を扱う事が出来るって事だな。お前達の担当はそうだな……………美術室を受け持つてもらおうか。」

その警察官はそう言いながら、顎で、美術室の場所を指し示した。

——態度が乱暴な警察官だな。…しかし、その事を愚痴っても仕方が無い。ここは無言で了解しよう。

そう思った僕は、安雄君とはる夫君の手を引いて、美術室に入った。安雄君は何か言いたそうだったが、こんな所でいざこざを起こしても何もない事はない。安雄君をなんとか宥<sup>なだ</sup>めた。その後、美術室全体を見回した。美術室には、数人の警察官とSAT隊員がいた。その警官とSAT隊員に軽く挨拶をすると、部屋の中央で、いつでも戦闘が出来るよう準備している。と言われた。

……取り敢えず、どうやって此処を抜け出して、のび太君の家に向かうかを考えないとね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2802ba/>

---

Secret Operations

2012年1月7日02時46分発行